

原著

犬の同伴が援助行動に及ぼす影響：場面想定法による検討

野瀬 出^{1)*}・政本 香²⁾・林 幹也³⁾・柿沼美紀¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学獣医学部

2) 松山東雲女子大学人文科学部

3) 明星大学心理学部

(2025年1月23日受付 / 2025年3月19日受理)

Influences of dog accompaniment on helping behavior: A vignette-based study

NOSE Izuru^{1)*}, MASAMOTO Kaori²⁾, HAYASHI Mikiya³⁾, KAKINUMA Miki¹⁾

1) Faculty of Veterinary Medicine, Nippon Veterinary and Life Science University

2) Faculty of Human Sciences, Matsuyama Shinonome College

3) Faculty of Psychology, Meisei University

(Received January 23, 2025 / Accepted March 19, 2025)

Abstract : This study examined the influence of dog accompaniment on helping behavior using the vignette method. A web-based survey was administered to 282 dog and 262 non-dog owners. The participants were presented with scenarios depicting three conditions (a person who was alone, with a child, and with a dog) in a park setting, involving two helping situations (giving directions or helping to find keys), and rated their likelihood of giving or receiving help in each scenario. The analysis showed that individuals who owned dogs were more likely to help dog-accompanied people, and even non-dog owners tended to help dog-accompanied people in high-distress situations. Furthermore, positive attitudes towards dogs facilitated helping behavior towards dog-accompanied persons, particularly in high-distress situations. On the other hand, in the case of being helped, the influence of dog ownership and attitudes towards dogs was limited. These findings suggest that the social facilitation effects of dog accompaniment may emerge from the interactions of these factors.

Key words : dog accompaniment, helping behavior, vignette method

J. Anim. Edu. Ther. 16: 1-9, 2025

緒言

これまでに実施された動物介在介入に関する研究から、犬の介在により社会的効果が得られることが示されている (Haughie et al 1992; Fick 1993; Bernstein et al 2000; Marr et al 2000; Sams et al 2006; Tissen et al 2007)。例えば、教室に犬を入れると児童がグループ活動をする時間が増加、攻撃行動が減少して、より落ち着いた教育環境が整うことが報告されている (Kotrschal & Ortbauer 2003)。また、精神科病棟に

おける研究では、犬を入れることで患者間のコミュニケーションが活発となり、その効果は直接犬と関わらなかった患者にも及んでいた (Haughie et al 1992)。

日常場面においても、人が犬を連れていることよって社会的相互作用が増加することが確認されている。高齢者が犬と散歩をすることで、他者との会話のきっかけが生まれ、その会話の中心には犬に関する話題が多く見られるようになった (Rogers et al 1993)。また、介助犬を連れた成人の車椅子使用者に関する研究

* 連絡先 : inose@nvl.u.ac.jp (〒180-8602 東京都武蔵野市境南町 1-7-1 日本獣医生命科学大学 比較発達心理学研究室)

では、介助犬がいる場合に、通行人からの微笑みや会話の頻度が増加することが示されている (Eddy et al 1998)。同様に、車椅子を使用する子どもを対象とした研究においても、介助犬の存在により通行人からの視線、会話、接触、微笑みといった社会的反応が増えることが確認されている (Mader et al 1989)。このように犬は社会的潤滑油として機能し、人々の言語的・非言語的コミュニケーションを活性化させることが示されている。

犬の同伴による社会的効果に関連する要因についても検討されている。ゴールデン・レトリバーの子犬が10週齢から33週齢になるまでの期間に、通行人の子犬に対する反応を記録した結果、子犬が若いほど接近する人が多く、特に女性からの接近が顕著であった (Fridlund and MacDonald 1998)。また、犬を連れて見知らぬ他者との社会的交流が増加する。犬を連れてある人の服装がだらしないよりも、きちんとしているほうが社会的交流は増えるが、どちらの服装であっても犬連れの効果認められた (McNicholas and Collis 2000)。Wells (2004) の研究では女性が犬を連れて歩くと、手ぶら、もしくはぬいぐるみや植物を持って歩くよりも、通行人からの反応 (視線、微笑み、会話) が多かった。犬種に関してはロットワイラーよりもラブラドル・レトリバーにおいて反応が多く、通行人の性別が男性よりも女性において、単独よりもペアで歩いている場合に反応が多くなっていた。

本研究では社会的行動の一つである援助行動に焦点をあてる。援助行動とは他者が困難な状況にある時に、その困難から抜け出すために他者に力を貸す行為である。挨拶や会話のような一般的な社会的相互作用と異なり援助コストが発生するため、行動を促すことがより困難である。Guéguen and Cicotti (2008) は、犬の同伴が援助行動に及ぼす影響について検討している。公共場面において、犬を連れて見知らぬ他者からの援助要請 (バス乗車料金を借りたい、落とした硬貨を拾ってほしい) に応じるかどうかを調べた。その結果、犬を連れてあるほうが、連れていない場合よりも援助を受ける頻度が多くなっていた (ただし、著者のGuéguenが発表した多くの論文においてデータの信頼性が問題視されており (例えば、Darnon and Klein 2019; Yamamoto and Ohtsubo 2020; O'Grady 2017)、当該論文についても精査が必要である)。

これまでに述べた先行研究では、研究方法として主に行動観察法が用いられてきた。しかし、この方法では犬と接触するため、犬に対してアレルギー反応を示す者や恐怖感情が強い者は研究に参加することが難しく、対象者の偏りが生じている可能性がある。また、

実験室以外の公共場面において実施されているため実施環境の統制が十分とは言えず、対照条件が設けられていないことが多い。本研究では、これらの問題を改善するために場面想定法を用いる。場面想定法とは、対象者に特定の具体的な場面を呈示し、その場面が実際に自分自身に生じたと仮定し、その事態に対する対象者の判断を求める方法であり、実際に体験させることが困難であったり、倫理的な問題が生じたりする場合に特に有効である (参考として、相沢 2010)。場面想定法を用いることで、犬が苦手な人々も対象に含めて研究を実施することができる。また、複数の場面を呈示して評価を求めることで、様々な要因が及ぼす影響を同一の条件下で比較することが可能となる。援助行動の生起を規定する要因として、援助者の個人的要因 (パーソナリティ特性、社会的立場等)、被援助者の個人的要因 (外見的特徴、援助要請の仕方等)、および状況的要因 (傍観者の存在、状況の曖昧さ等) があげられる (山際・堀 1991; 高木 1997)。どの要因が援助行動の促進と関連するのかを検討するには、場面想定法が適している。

本研究の目的は、複数の場面における援助行動について場面想定法を用いて調査を行い、犬の同伴者への援助行動に影響を及ぼす要因を明らかにすることである。特に犬の飼育経験や援助内容、犬に対する好悪感が援助行動にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。さらに犬の同伴者に対する援助場面に加えて、犬の同伴者からの被援助場面についても設定し、両場面における心理過程について比較検討を行った。

方 法

1. 調査対象者

日本在住の18歳から65歳の成人を対象にWeb調査を実施した。データ収集は調査会社 (クロス・マーケティング) に依頼した。対象者の条件は、現在犬を飼育している人、もしくは犬の飼育経験がない人とし、過去に犬の飼育経験があるが現在飼育していない人は対象から除外した。データ収集の際には、犬の飼育経験の有無ごとの人数がそれぞれ300名 (計600名) になるように調整した。調査期間は2019年9月2日から3日であった。参加者はアンケートに回答することで、調査会社から商品券等に交換できるポイントを得ることができた。Web画面上で調査内容やデータの取り扱い方等について文章による説明を行い、調査への参加に関する同意を得た。調査は無記名により行われ、個人を特定できる情報は取得しなかった。

2. 調査手続き

援助行動に関して、場面想定法による調査を実施した。例えば「公園に犬を連れてある人 (Xさん) がい

ました。Xさんは道に迷って、同じ場所をウロウロしています。あなたはXさんに道を教えてあげますか?という質問文に対して、5段階（1全くそう思わない、2そう思わない、3どちらでもない、4そう思う、5非常にそう思う）で評定を求めた。質問文は、3名の人物（一人で歩いている人、子どもを連れている人、犬を連れている人）、2種類の援助内容（道案内、鍵拾い）、および2種類の場面（援助場面、被援助場面）の組み合わせにより構成されていた（計12項目、資料参照）。援助内容の道案内は「道に迷って、同じ場所をウロウロしている人に道を教える」、鍵拾いは「排水溝に落とした鍵を取り出すために重いフタを持ち上げるのを手伝う」状況を設定している。また、援助場面では回答者が登場人物に対して援助すると思うか、被援助場面では登場人物が回答者に対して援助すると思うかについて評定を求めた。質問項目は、先行研究（中川・横田・中西、2015）を参考にして作成した。

援助行動の質問に加えて、質問文に登場する人物の印象評定、犬と子どもに対する好悪感、犬の飼育経験、自分が犬好きであることの認識、およびデモグラフィック特性（年齢、性別、居住地）に関する質問にも回答を求めた。人物の印象評定は「親しみやすいかー親しみにくいのか」「話しかけやすいかー話しかけにくいのか」「感じが良いかー感じが悪いのか」の3項目に対して5段階尺度（SD法）による評定を求めた。犬と子どもに対する好悪感、一般的な犬や子どもが好きかどうかを5段階（1全くそう思わない、2そう思わない、3どちらでもない、4そう思う、5非常にそう思う）で評定を求めた。自分が犬好きであることの認識は、「あなたは周りの人から“犬好き”だと思われていますか」、「あなたは他の人から“犬好きだね”と言われたら、嬉しいですか」、「あなたは自己紹介やなじみの無い人との会話の中で、自分が“犬好き”であることを伝えますか」の3項目について5段階尺度による回答を求めた。また回答の信頼性を確認するため「この質問には、“どちらでもない”を選択してください」という項目を設けた。

3. 統計解析

統計解析にはR（ver.4.4.2, <https://www.r-project.org/>）とanovakun（ver.4.8.9, <https://riseki.cloudfree.jp/>）を用い、分散分析を実施した。球面性の検定（Mendoza）を行い、球面性の仮定が成り立たない場合には ϵ による自由度の調整（Huynh-Feldt）を行った。多重比較を実施する際にはShafferの方法を用いた。

結果

1. 飼い主群・非飼い主群の特性

調査会社により600名からのデータが収集された。「この質問には、“どちらでもない”を選択してください」という項目において、その回答を選んだない場合はデータの信頼性が低いと考えられるため分析対象から除外した。最終的な分析データには、犬の飼育経験者282名（男性167名、女性115名、19～65歳、平均年齢49.6歳、SD 10.6）および非飼育経験者262名（男性133名、女性129名、19～65歳、平均年齢48.0歳、SD 10.8）の計544名が含まれていた。

犬と子どもに対する好悪感の平均評定値をTable 1に示した。得点が高いほど、対象を「好き」であることを示す。好悪感評定値について、群（飼い主・非飼い主）×対象（犬・子ども）の2要因の分散分析を実施した結果、交互作用が有意であった（ $F(1,542) = 68.46, p < .001, \eta_p^2 = .02$ ）。下位検定（単純主効果検定および多重比較）の結果、犬の好悪感評定値は非飼い主群よりも飼い主群において高かった（ $p < .001$ ）。また飼い主群においては、子どもよりも犬の好悪感評定値が高くなっていた（ $p < .001$ ）。

質問文に登場する人物の印象評定については3項目の平均評定値を算出した（Table 2）。得点が高いほど、良い印象を抱いていることを示す。印象評定値に対して、群（飼い主・非飼い主）×人物（一人・犬連れ・子連れ）の2要因の分散分析を実施した結果、交互作用が有意であった（ $F(1.84, 997.61) = 32.45, p < .001, \eta_p^2 = .05$ ）。単純主効果の検定を実施したところ、犬連れに対する印象評定値が、非飼い主群よりも飼い主群において高くなっていた。また多重比較の結果、飼い主群においては犬連れ、子連れ、一人の順に印象評定値が高く（ $p < .05$ ）、非飼い主群においては子連れ、犬連れ、一人の順に印象評定値が高くなっ

Table 1 犬・子どもに対する平均好悪感評定値（SD）

群	犬	子ども
飼い主群	4.29 (0.69)	3.40 (0.95)
非飼い主群	3.14 (1.09)	3.24 (0.97)

Table 2 登場人物に対する平均印象評定値（SD）

群	一人	犬連れ	子連れ
飼い主群	2.64 (0.56)	3.54 (0.66)	3.30 (0.68)
非飼い主群	2.63 (0.57)	3.06 (0.67)	3.27 (0.66)

ていた ($p < .05$)。

2. 援助行動の評定傾向

最初に援助行動の全体的な評定傾向について把握するため、各群における援助場面ごとの平均評定値を算出した (Table 3)。得点が高いほど援助する (援助場面)、もしくは援助してもらえ (被援助場面) と考えていることを示す。群 (飼い主・非飼い主) × 場面 (援助・被援助) の2要因の分散分析を実施した結果、交互作用が有意であった ($F(1,542) = 4.87, p < .05, \eta_p^2 = .01$)。交互作用について下位検定を実施した結果、飼い主群における場面の単純主効果 ($p < .001, \eta_p^2 = .06$)、非飼い主群における場面の単純主効果 ($p < .001, \eta_p^2 = .02$)、援助場面における群の単純主効果 ($p < .001, \eta_p^2 = .46$)、被援助場面における群の単純主効果 ($p < .001, \eta_p^2 = .30$) がそれぞれ有意であった。両場面において飼い主の評定値が非飼い主よりも

高く、両群において援助場面の評定値が被援助場面の評定値よりも高くなっていて、両群の差は被援助場面よりも援助場面においてより大きかった。

各群・各場面における、登場人物および援助内容ごとの平均評定値を Figure 1A ~ D に示した。飼い主群・援助場面 (Figure 1A) の援助行動評定値に対して、人物 (一人・犬連れ・子連れ) × 援助内容 (道案内・鍵拾い) の2要因の分散分析を実施した結果、人物の主効果が有意であった ($F(1.98,555.44) = 9.40, p < .001, \eta_p^2 = .03$)。多重比較の結果、犬連れおよび子連れの人物に対する評定値が一人の人物に対するそれよりも高くなっていて ($p < .05$)。

非飼い主群・援助場面 (Figure 1B) の援助行動評定値に対して、人物 × 援助内容の2要因の分散分析を実施した結果、人物と援助内容の交互作用が有意であった ($F(2,522) = 16.13, p < .001, \eta_p^2 = .05$)。下位検定の結果、道案内においては子連れの人物に対する評定値が一人・犬連れよりも高く、鍵拾いにおいては犬連れ・子連れの人物に対する評定値が一人よりも高くなっていて ($p < .05$)。また、犬連れの人物において、道案内よりも鍵拾いの評定値が高くなっていて ($p < .001$)。

飼い主群・被援助場面 (Figure 1C) の援助行動評定値に対して、人物 × 内容の2要因の分散分析を实

Table 3 群・場面ごとの平均援助行動評定値 (SD)

群	援助場面	被援助場面
飼い主群	3.67 (0.64)	3.03 (0.67)
非飼い主群	3.31 (0.79)	2.81 (0.72)

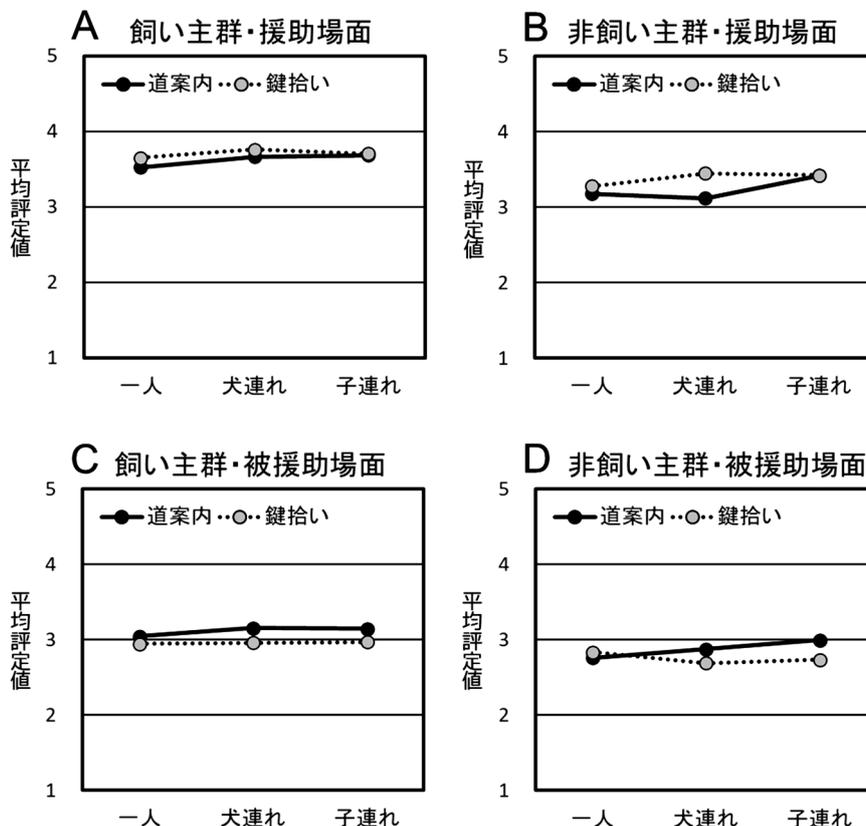


Figure 1 各群・場面における平均援助行動評定値

施した結果、援助内容の主効果が有意であった ($F(1,281)=15.62, p<.001, \eta_p^2=.05$)。鍵拾いよりも道案内における評定値が高くなっていた。

非飼い主群・被援助場面 (Figure 1D) の援助行動評定値に対して、人物×内容の2要因の分散分析を実施した結果、人物と援助内容の交互作用が有意であった ($F(1.96,512.84)=13.56, p<.001, \eta_p^2=.05$)。下位検定の結果、道案内においては一人、犬連れ、子連れの順に評定値が高く、鍵拾いにおいては一人の人物に対する評定値が犬連れ・子連れよりも高くなっていた ($p<.05$)。また、犬連れと子連れの人物において、鍵拾いよりも道案内の評定値が高くなっていた ($p<.05$)。

3. 援助行動評定と好悪感との関係

犬への好悪感評定値 (1～5) ごとの人数を Figure 2 に示す。好悪感1・2には飼い主群がほとんど含まれておらず、逆に好悪感5においては非飼い主の人数が少なくなっていた。犬の飼育経験による影響を除外するため非飼い主群のデータのみを用い、各好悪感評定値における犬連れの人物に対する援助行動の平均評定値を算出した (Figure 3)。

犬連れ・援助場面 (Figure 3A) の援助行動評定値

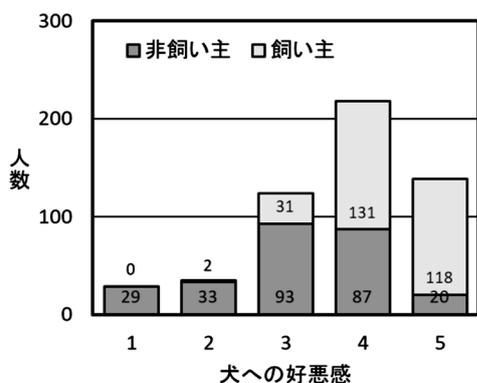


Figure 2 犬への好悪感評定値ごとの人数分布

に対して、犬への好悪感 (1～5)×援助内容 (道案内・鍵拾い) の2要因の分散分析を実施した結果、好悪感と援助内容の交互作用が有意であった ($F(4,257)=2.56, p<.05, \eta_p^2=.03$)。下位検定の結果、好悪感2～4において道案内よりも鍵拾いの評定値が高くなっていた ($p<.01$)。また、道案内では好悪感1よりも好悪感4・5、好悪感2よりも好悪感3～5、好悪感3よりも好悪感5において評定値が高くなっていた ($p<.05$)。鍵拾いでは好悪感1よりも好悪感3～5において評定値が高くなっていた ($p<.05$)。

犬連れ・被援助場面 (Figure 3B) の援助行動評定値に対して、犬への好悪感×援助内容の2要因の分散分析を実施した結果、好悪感の主効果 ($F(4,257)=3.69, p<.01, \eta_p^2=.05$) と援助内容の主効果 ($F(1,257)=4.28, p<.05, \eta_p^2=.01$) が有意であった。援助内容については、鍵拾いよりも道案内の評定値が高くなっていた。好悪感については、好悪感1・5よりも好悪感4において評定値が高くなっていた ($p<.05$)。

考察

本研究では、場面想定法を用いて犬の同伴が援助行動に及ぼす影響について検討した。データ解析の結果、犬を連れている人物への援助行動は、回答者の犬の飼育経験の有無や犬に対する好悪感によって影響を受けていることが明らかになった。

まず、飼い主群と非飼い主群の特性について調べたところ、飼い主群は非飼い主群よりも一般的な犬に対して好意的で、犬を連れた登場人物の印象が良かった (Table 1, 2)。また非飼い主群は犬連れよりも子連れの人物に対して印象が良かったが、飼い主群では子連れよりも犬連れの人物に対する印象が良かった。犬の飼育経験があることによって、犬やその同伴者に対する感情や印象が肯定的になることが確認された。

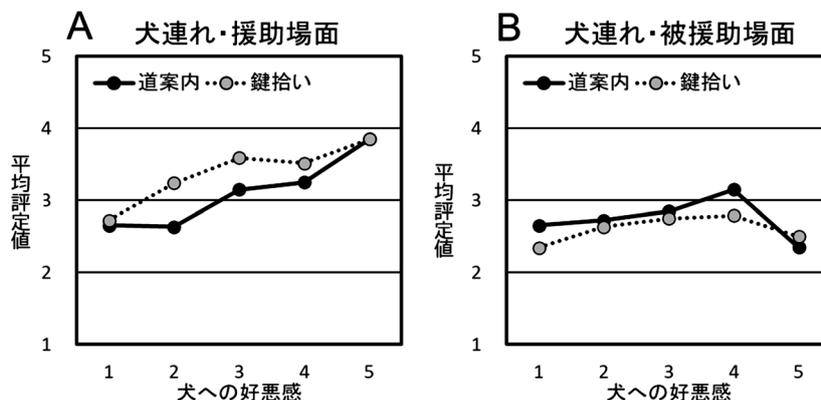


Figure 3 非飼い主群における犬への好悪感と援助行動評定値との関係

援助行動評定の全般的な傾向として、援助場面（回答者が登場人物を助ける）のほうが、被援助場面（回答者が登場人物に助けられる）よりも評定値が高くなっていた（Table 3）。回答者は困難な状況にある他者を援助することには積極的であるが、他者からの援助は期待できないと捉える傾向があることを示している。この傾向は先行研究とも一致しており、被援助者は他者の援助意欲を実際よりも低く見積もり、他者が援助要請を迷惑に感じていると捉える傾向があることが報告されている（Zhao and Epley 2022）。また、飼い主群の評定値は、非飼い主群よりも高くなっていた（Table 3）。これは援助場面・被援助場面ともに認められており、質問文中に犬が登場することで、質問項目全体に対して肯定的な態度が形成された可能性がある。

援助場面の評定について条件別に分析した結果、飼い主群、非飼い主群ともに、対象が一人よりも子連れの場合に評定値が高くなっていた（Figure 1AB）。これは対象が子どもを連れていて自分で問題を解決することが難しくなるため、その人を援助しようとする意欲が高くなると考えられる。飼育経験による違いが認められ、飼い主群では犬連れの人と子連れの人に対する評定値が同程度であり（Figure 1A）、犬を子どもに近い存在として捉えている可能性が示唆された。一方、非飼い主群では、犬連れの人への援助行動評定は援助内容によって異なっており、道案内よりも鍵拾いにおいて評定値が高くなっていた（Figure 1B）。鍵拾いでは排水口の重いフタを上げなければならないため、道案内よりも困窮度がより高い（問題解決のために労力を要する）状況と言える。犬に不慣れな非飼い主群は、犬連れの人への困窮度が低ければ積極的に助けようとしませんが、困窮度が高い場合には助ける傾向にあることを示している。

被援助場面の評定について条件別に分析した結果、飼い主群においてはどの人物に対しても道案内よりも鍵拾いの評定値が低くなっており（Figure 1C）、援助者の負担が大きい鍵拾いは、相手の状況に関わらず援助を受けることが難しいと捉えていた。犬の同伴による援助行動評定への影響は認められなかった。非飼い主群では犬連れと子連れの人において、道案内よりも鍵拾いの評定値が低くなっていた（Figure 1D）。犬や子どもを連れていては他者を援助する際に障害要因となり（援助の邪魔になる）、特に鍵拾いでは対象からの援助は期待できないと捉えていた。

非飼い主群のデータについて、犬への好悪感と犬連れの人への援助評定との関連について分析した結果、援助場面では犬に好意的である程、援助行動の評定値が増加していた（Figure 3A）。また好悪感が

中間的（評定値2～4）な場合に、道案内よりも鍵拾いの援助行動評価値が高かった。これらの結果は、犬をかなり苦手とする回答者は犬連れの人を積極的に援助しようとせず、犬をかなり好きな人は援助をする可能性が高いこと、またその犬に対する好悪感が中間的な回答者においては人物の困窮度が高ければ助ける傾向にあることを示している。被援助場面においては、道案内よりも鍵拾いにおいて評定値が低くなる傾向が認められた（Figure 3B）。カギ拾いは援助者の負担が大きいため、援助をより受けにくいと捉えていた。援助場面では犬への好悪感が高くなると援助行動評定も増加していたが、被援助場面においてはそのような傾向は認められなかった。

これらの結果をまとめると、以下のことが示唆される。1) 犬の飼育経験があると、犬同伴者に対する援助行動が子連れに対するそれと同程度に促進される。2) 犬の飼育経験がない人では、被援助者の困窮度が高い場合には犬連れを子連れと同程度に援助する傾向がある。3) 犬に対して好意的であるほど犬同伴者への援助行動が促進され、特に困窮度が高ければ促進されやすい。4) 被援助場面においては、犬の飼育経験があったり、犬に対して好意的であっても犬同伴者からの援助を受けやすくなるとは捉えていない。

援助行動の生起を規定する要因として、援助者の個人的要因、被援助者の個人的要因、状況的要因があげられる（山際・堀 1991; 高木 1997）。本研究の援助場面においては、回答者の犬の飼育経験や犬への好悪感が援助者の個人的要因、登場人物が犬連れかどうかは被援助者の個人的要因、援助内容は状況的要因に相当する。本研究の結果は、犬同伴者に対する援助行動がそれら要因の相互作用により生起するかどうかが決まることを示している。つまり、被援助者の個人的要因（犬の同伴）と援助者の個人的要因（犬の飼育経験、犬に対する好意的感情）がマッチしていれば援助行動が促進される。マッチしていない場合であっても、状況的要因によっては（被援助者の困窮度が高い場合は）、一定の範囲内で（犬を極端に嫌いでない限りは）援助行動が促進されると思われる。

一方で、被援助場面ではそれらの要因の明確な関係性は認められなかった。犬を飼っていても、犬同伴者からの援助が得られやすいとは捉えていない。むしろ困窮度が高い状況では、犬を連れていてことが妨害要因となり、犬同伴者からの援助行動は期待できないと捉える傾向があった。他者を援助しようとする意欲と他者からの援助の期待は、影響を及ぼす要因や影響の仕方が異なっていることが示唆される。

犬介在介入の場面においても、同様の影響が現れる可能性がある。他者に対する援助行動や協力行動を促

したい場合、参加者が犬好きであれば社会的効果が生じるが、犬嫌いであれば効果は期待できない。犬に対する好悪感が中間的な場合は、状況設定（例えば、困っている内容や援助方法の明示）が重要となることが予想される。

本研究の限界として、第一に場面想定法を用いた調査であることがあげられる。場面想定法を用いることで犬と直接的に対面できない者を研究対象として、複数の状況を同じ条件下で比較することが可能となったが、当然ながら実際の場面とは異なる可能性がある。犬を介在させた実際の場面での行動実験を行い、本研究結果とともに相補的に検討することで、より正確な理解が得られると考えられる。第二に、援助行動に影響を及ぼす他の重要な要因が検討されていない点である。例えば、援助者のパーソナリティ特性（山際・堀 1991; 伊東 1996）、被援助者の外見的特徴（Nadler et al 1982; McNicholas and Collis 2000）や同伴している犬の種類（Wells 2004）、社会的立場（Sinha and Jain 1986）や社会規範（Oarga et al 2015）、周囲にいる他者の存在（Darley and Latané 1968）等が援助行動の生起に関わっていることが報告されている。さらに、援助行動の生起には地域差があることが知られており（例えば、日本人は他者に援助要請を求めない傾向がある；Zheng et al 2021）、そのような社会・文化的背景についても考慮しなければならない。実際の援助場面ではこれらの要因が複合的に影響を及ぼしており、包括的な理論的枠組みの構築と実証的検討が求められる。これらの要因と犬の同伴効果との関係について明らかにすることは、動物介在介入の社会的効果を最大化する上でも重要であると考えられる。

利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

謝辞

本研究のデータ分析の際には、2019年度日本獣医生命科学大学卒業生である岩坂知樹さんに協力して頂いた。本論文の執筆において生成 AI（Claude 3 Opus）を使用し、文章の校正、表現の明確化、および読みやすさの向上に活用した。生成 AI の使用は文章表現の改善に限定し、研究内容や結果の解釈には影響を与えていない。

文献

- 相澤直樹. 2010. 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応について：他者の意図としての敵意と嫌悪に着目して 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3, 1-10.
- Bernstein P, Friedman E, Malaspina A. 2000. Animal-assisted therapy enhances resident social interaction and initiation in long-term care facilities. *Anthrozoös*, 13, 213-224.
- Darley JM, Latané B. 1968. Bystander intervention in emergencies: Diffusion of responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 377-383.
- Darnon C, Klein O. 2019. Expression of concern regarding six articles by Dr. Nicolas Guéguen. *International Review of Social Psychology*, 32, 11.
- Eddy J, Hart LA, Boltz RP. 1988. The effects of service dogs on social acknowledgements of people in wheelchairs. *Journal of Psychology*, 122, 39-45.
- Fick KM. 1993. The influence of an animal on social interactions of nursing home residents in a group setting. *American Journal of Occupational Therapy*, 47, 529-534.
- Fridlund AJ, MacDonald M. 1998. Approaches to Goldie: A field study of human response to canine juvenescence. *Anthrozoös*, 11, 95-100.
- Guéguen N, Cicotti S. 2008. Domestic dogs as facilitators in social interaction: An evaluation of helping and courtship behaviors. *Anthrozoös*, 21, 339-349.
- Haughie E, Milne D, Elliott V. 1992. An evaluation of companion pets with elderly psychiatric patients. *Behavioral Psychotherapy*, 20, 367-372.
- 伊東秀章. 1996. 援助行動の質—援助の質の高さと関連する性格特性とジェンダー—. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 36, 261-272
- Kotrschal K, Ortbauer B. 2003. Behavioral effects of the presence of a dog in a classroom. *Anthrozoös*, 16, 147-159.
- Mader B, Hart LA, Bergin B. 1989. Social acknowledgments for children with disabilities: Effects of service dogs. *Child Development*, 60, 1529-1534.
- Marr CA, French L, Thompson D, Drum L, Greening G, Mormon J, Henderson I, Hughes CW. 2000. Animal-assisted therapy in psychiatric rehabilitation. *Anthrozoös*, 13, 43-47.
- McNicholas J, Collis GM. 2000. Dogs as catalysts for social interactions: robustness of the effect. *British Journal of Psychology*, 91, 61-70.
- Nadler A, Shapira R, Ben-Itzhar S. 1982. Good looks may help: Effects of helper's physical attractiveness and sex of helper on males' and females' help seeking behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 90-99.
- 中川裕美, 横田晋大, 中西大輔. 2015. 実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討：広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験 社会心理学研究, 30, 153-163.
- Oarga C, Stavrova O, Fetchenhauer D. 2015. When and why is helping others good for well-being? The role of belief in reciprocity and conformity to society's expectations. *European Journal of Social Psychology*, 45, 242-254.

18. O'Grady C. 2017. Researchers find oddities in high-profile gender studies. <https://arstechnica.com/science/2017/11/researchers-find-oddities-in-high-profile-gender-studies/> (最終閲覧日 令和6年12月1日)
19. Rogers J, Hart L, Boltz R. 1993. The role of pet dogs in casual conversations of elderly adults. *The Journal of Social Psychology*, 133, 265-277.
20. Sams MJ, Fortney E, Willenbring S. 2006. Occupational therapy incorporating animals for children with autism: A pilot investigation. *The American Journal of Occupational Therapy*, 60, 268-274.
21. Sinha A, Jain A. 1986. The effects of benefactor and beneficiary characteristics on helping behavior. *The Journal of Social Psychology*, 126, 361-368.
22. 高木修. 1997. 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, 1, 1-21.
23. Tissen I, Hergovich A, Spiel C. 2007. School-based social training with and without dogs: evaluation of their effectiveness. *Anthrozoös*, 20, 365-373.
24. Wells DL. 2004. The facilitation of social interactions by domestic dogs. *Anthrozoös*, 17, 340-352.
25. 山際勇一郎, 堀洋道. 1991. 援助行動に影響を及ぼす性格特性の総合的検討 *Tsukuba Psychological Research*, 13, 113-119.
26. Yamamoto S, Ohtsubo Y. 2020. Expression of concern about Dr. Nicolas Guéguen's article published in the *Letters on Evolutionary Behavioral Science (LEBS)*. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 11, 15-16.
27. Zhao X, Epley N. 2022. Surprisingly Happy to Have Helped: Underestimating Prosociality Creates a Misplaced Barrier to Asking for Help. *Psychological Science*, 33, 1708-1731.
28. Zheng S, Masuda T, Matsunaga M, Noguchi Y, Ohtsubo Y, Yamasue H, Ishii K. 2021. Cultural differences in social support seeking: The mediating role of empathic concern. *PLoS ONE*, 16, e0262001.
2. 公園に子連れで歩いている人 (Xさん) がいました。Xさんは道に迷って、同じ場所をウロウロしています。あなたはXさんに道を教えてあげると思いますか？
3. 公園に犬連れで歩いている人 (Xさん) がいました。Xさんは道に迷って、同じ場所をウロウロしています。あなたはXさんに道を教えてあげると思いますか？
4. 公園に一人で歩いている人 (Xさん) がいました。Xさんは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには、重いフタを持ち上げなくてはなりません。あなたは排水溝のフタを開けるのを手伝ってあげると思いますか？
5. 公園に子連れで歩いている人 (Xさん) がいました。Xさんは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには、重いフタを持ち上げなくてはなりません。あなたは排水溝のフタを開けるのを手伝ってあげると思いますか？
6. 公園に犬連れで歩いている人 (Xさん) がいました。Xさんは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには、重いフタを持ち上げなくてはなりません。あなたは排水溝のフタを開けるのを手伝ってあげると思いますか？
7. 公園に一人で歩いている人 (Xさん) がいました。あなたは道に迷って、同じ場所をウロウロしています。Xさんは道を教えてくれると思いますか？
8. 公園に子連れで歩いている人 (Xさん) がいました。あなたは道に迷って、同じ場所をウロウロしています。Xさんは道を教えてくれると思いますか？
9. 公園に犬連れで歩いている人 (Xさん) がいました。あなたは道に迷って、同じ場所をウロウロしています。Xさんは道を教えてくれると思いますか？
10. 公園に一人で歩いている人 (Xさん) がいました。あなたは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには、重いフタを持ち上げなくてはなりません。Xさんは排水溝のフタを開けるのを手伝ってくれると思いますか？
11. 公園に子連れで歩いている人 (Xさん) がいました。あなたは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには、重いフタを持ち上げなくてはなりません。Xさんは排水溝のフタを開けるのを手伝ってくれると思いますか？
12. 公園に犬連れで歩いている人 (Xさん) がいました。あなたは持っていたカギを排水溝の中に落としてしまいました。カギを取り出すには、重いフタを持ち上げなくてはなりません。Xさんは排水溝のフタを開けるのを手伝ってくれると思いますか？

資料

質問項目一覧

1. 公園に一人で歩いている人 (Xさん) がいました。Xさんは道に迷って、同じ場所をウロウロしています。あなたはXさんに道を教えてあげると思いますか？

犬の同伴が援助行動に及ぼす影響：場面想定法による検討

野瀬 出¹⁾・政本 香²⁾・林 幹也³⁾・柿沼美紀¹⁾

- 1) 日本獣医生命科学大学獣医学部
- 2) 松山東雲女子大学人文科学部
- 3) 明星大学心理学部

(2025年1月23日受付/2025年3月19日受理)

要約：本研究では、犬の同伴が援助行動に及ぼす影響を場面想定法により検討した。犬の飼育経験者282名、非飼育経験者262名を対象にweb調査を行った。調査では3名の人物（公園での一人歩き、子連れ、犬連れ）が登場し、2つの援助内容（道案内、鍵拾い）について、回答者が登場人物に援助を求められる援助場面、もしくは回答者が登場人物に援助を求める被援助場面において、それぞれ援助要請に応えるかどうかについて評定を求めた。データ分析の結果、援助場面においては犬の飼育経験があると、犬同伴者に対する援助行動が促進されること、犬の飼育経験がなくても犬同伴者の困窮度が高い場合には援助する傾向があること、犬に対して好意的であれば犬同伴者への援助行動が促進され、特に困窮度が高ければ促進されやすくなることが明らかになった。一方で、被援助場面においては、犬の飼育経験や犬への好悪感による影響は限定的であった。犬を連れていることにより得られる社会的効果は、これらの要因が相互作用することで生じている可能性が示唆された。

キーワード：犬の同伴、援助行動、場面想定法

J. Anim. Edu. Ther. 16: 1-9, 2025
